

ロールシャッハ法による現代の母親イメージの検討

—母娘関係尺度との関連について—

A Study of Modern Mother's Image by Rorschach test
—About the relationship with the Mother-Daughter Relationship Scale—

遠藤 愛里

Airi Endo

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻

キーワード：青年期女性，ロールシャッハ法，イメージカード選択

Key words：Adolescent Women, Rorschach Technique, Image Cards

1. 研究目的

近年，女性の社会進出や「イエ制度」からの脱却といった社会の変容にともない，家族形態や養育環境も多様化が進んでいる．昨今の青年期女性の将来選択に焦点を当てると，相対化した価値観の中で自分探しをしながら，養育者からの精神的自立を図り，長く複雑な成長過程を歩んでいるのが彼らの現状といえよう．多様化が進むこの現代において，青年期を迎えた女性たちは何を心のよりどころとしながら精神的自立を果たし，自己確立を目指すのだろうか．

先行研究を概観すると，女性の精神的自立には母親との関係が影響しており（落合・佐藤，1996；水本ら，2011；水本，2018），「母親」の存在を抜きに女性の自己確立のプロセスを論じることは困難だと分かる（渡邊，1997；藤原・伊藤，2007；高木・柏木，2000）．水本ら（2011）では青年期女性の精神的自立を論じる中で「互いの信頼を基盤とした親和的關係性を基盤として発達する親からの心理的分離」を“適応的な自立”と位置付け，母親と適度な心理的距離を保つことで女性独自の自己確立が可能になるとした．水本らによって開発された「母子関係における精神的自立尺度」は，青年期女性側から見た母娘の關係性の詳述を可能にするとともに，精神的自立の在り方を示す4種の類型（「自立型」「密着型」「依存葛藤型」「母子関係疎型」）での分類を可能にしている．さらに「自立型」を除く全ての類型が最終的には「自立型」に至ると結論付けており（水本，2019），この見解は青年期女性の成長過程を考えるにあたり貴重な

示唆を与えるものの，現時点ではあくまで“到達点”が示されたに過ぎず，このアイデアを適応的な自立の“道標”として心理臨床の現場にて活用するためには，その実態を一層具体的に把握する必要があると考える．

ところで，心理臨床の現場では，人の心を理解するうえで，養育者との關係性に注目する力動的な考え方に歴史的に馴染みがある．精神分析に代表される力動的な心理療法では，幼少期からの養育者との關係性や相互交流に基づいて心の中に形成されたイメージが，その人の対人關係の在り方をはじめとする自己形成に影響を及ぼすという発想でものを考える．つまり，実際の母親との關係にとどまらず，心に内在化された心的現実としての「母親像（母親イメージ）」との關係をも併せて理解し，その変容過程を扱うことが重視され，心理アセスメントはもとより面接の展開を予測するのに役立てられている（石井，2019；井上，2021）．したがって，現代の青年期女性における自己確立の過程をとらえるにあたり，実際の母娘關係のみならず，内在化された心像としての母親像との關係性の視点を導入することは，彼らの中で進行中の成長過程を立体的・動的に捉えることを可能にし，多角的な視点で適応的な自立と自己確立に至る道筋を示唆するものと考えられる．

そこで，本研究の研究Iでは水本（2011）の尺度を用いて，青年期を迎えた女子大学生を対象に精神的自立の類型分類を試みることで，母娘關係の実態と自己確立の様相を量的に明らかにすることを第一の目的とする．研究Iの結果をもとに研究II

では、「自立型」に分類された群とその前段階にあるとされる「密着型」に属する群に注目し、投映法（ロールシャッハ法）を用いて「母親像」の展開を中心に質的に深く見ていくことで、現代に生きる青年期女性における「適応的な自立」に至る成長発達過程を探索的に詳述することを第二の目的とする。ロールシャッハ法（以下、ロ法）は臨床場面で用いられている代表的な投映法の1つであり、長年にわたる研究の蓄積があり、臨床的な妥当性を有するものである。また実施法の一環である「イメージカード選択」の手続きは、「母親イメージカード」を含む家族構成員のカードと「自己イメージカード」を選び、選んだ理由について自由に語ってもらうという方法である。この手続きを経ることで「自分は家族について、そして自分自身についてどのように思っているのか」を想起し、内在化された母親像や自己像を言語化しやすくなるという利点があり、現場での見立てに役立てられている。以上の点から、ロ法は母親像の展開を中心に検討を試みる研究Ⅱの目的にかなう手法だと考えられる。

精神的自立の達成を自覚している女性たちがどのような母親（像）と関わりながら、現在進行中の自己確立の過程を歩んでいるのかについて具体的な示唆が得られることで、現代青年期女性一般に見られる成長発達過程について新たな見解を臨床現場にも提供するものと期待する。

方法

<研究Ⅰ>

【調査対象】大学に通っている成人女性 150 名程度を予定している。

【実施場所】授業時間外の本学内のラウンジ等の開放スペースで実施する。

【実施方法】研究実施者が研究対象者に直接、調査の依頼と説明を行い、同意を得た後に自記式質問紙調査を実施する。回答終了後、研究実施者が質問紙を回収し、研究Ⅱへの参加協力を呼びかける調査依頼状を配付し終了とする。

【調査項目】母子関係における精神的自立尺度（水本ら、2011）（11項目）（5件法）、フェイスシート（家族について、同別居、学年、年齢、所属。）

【分析方法】SPSS を用いて分析する。

なお、新型コロナウイルス感染症防止対策の観点から対面での調査実施が困難になった場合、WEB 調査に切り替えての実施も予定している。

<研究Ⅱ>

【予定研究対象者数】研究Ⅰに参加した方のうち「自立型」「密着型」に該当する 10 名前後。

【実施場所】大妻女子大学多摩キャンパス内 面接室を予定している。

【実施方法】研究実施者（共同研究者）よりメールにて研究Ⅱの調査依頼を行う。調査当日は研究実施者が個別にロールシャッハ法の施行と、イメージカード選択に関するインタビューを実施する。調査内容は録音し、その内容は逐語化する。録音が難しい場合は、筆記にて記録を残す。

【調査項目】ロ法（片口法）に基づき、実施する。

【分析方法】ロ法の結果については、片口法のスコアリング方法に則り質的に検討を行う。

2. 研究実施内容

日本心理学会第 85 回大会と、日本心理臨床学会第 41 回に参加し、研究に関する発表を聞くことで、研究に関するさまざまな知見を得ることができた。6 月から 10 月にかけて青年期女性の母娘関係に関する文献やロールシャッハ法に関する文献を読み、研究テーマに関するさまざまな情報を得ることができた。3 月には専攻内で行われる修士論文構想発表会にて発表を行ない、さまざまな指摘を得ることで、より詳細な研究計画へと修正を行った。

3. まとめと今後の課題

まとめとして、今年度は研究テーマである青年期女性における母娘関係の特徴や、ロールシャッハ法に関する知識を深めた。先行研究を概観したことで、本研究の位置づけや意義を明確化した。

今後の予定としては、令和 3 年 3 月に大妻女子大学生命科学研究倫理委員会に研究計画を提出して、承認が得られ次第、調査を実施する。研究Ⅰの調査は 3 月～4 月に実施し、研究Ⅱの調査は 4 月～9 月に実施する。1 月までに分析と結果・考察をまとめ、修士論文として提出する。

付記

本研究は、大妻女子大学人間生活文化研究所令和 3 年度大学院生研究助成(B)(課題番号：DB2103)より研究助成を受け行った。

主要参考文献

[1] 水本深喜・山根律子（2011）. 青年期から成人期への移行期における母娘関係—「母子関係にお

ける精神的自立尺度」の作成および「母子関係の4 類型モデル」の検討— 教育心理学研究, 59(4), 462-473.

[2] 水本深喜 (2019). 青年期から成人期への移行期にある女性の母親との関係の発達的变化—精神的自立と親密性の視点から— 青年心理学研究, 30, 115-129.

[3]石井佳葉 (2019). ロールシャッハ法における父親・母親イメージカード選択の実態 京都大学大学院教育学研究科紀要, (65), 29-41.

[4]片口安史 (1987). 新・心理診断法: ロールシャッハ・テストの解説と研究. 金子書房.

[5]井上靖子 (2021). 「母なるものの元型」イメージがもたらす心の変容 創元社.